

ヤマザクラ (3) 和歌に託した心

藤原 道夫

ヤマザクラを詠んだ歌は数多くあるだろう。中でも3人の歌について私見を述べてみたい。

本居宣長 (1730~1801)

敷島の 大和心を 人とはば 朝日に匂う 山桜花

この歌は宣長 61 歳の自画像に讃として書かれている。『桜の文学史』の著者小川和佑さんはこの歌について「もののあわれという新しい批評の視点を提唱した国学者らしくない、イデオロギーの歌だ。それに他の歌に比して文学性は見劣りがする」と批判している。なるほど思う一方で、賛なのだから他人に問われれば私はこう答える、と和歌の形式をとって書いたまでのこととも思う。朝日を受けるヤマザクラは確かに美しい。問題は多様な大和心という概念をヤマザクラに閉じ込めていること。国学者は自己撞着に陥ったか。

西行 (1118~1190)

多くの優れた桜の歌を残した。気になるのは、この人にとって桜が心の中にあるのではなく頭の中にあるように思えること。読むほどに「私は桜をこのように思う」という自己主張が見えてくる。次の歌は最たるものではないだろうか。

ねがわくは 花の下にて 春死なん この望月の 如月のころ

能「西行桜」の中で、西行は自宅の庭にある桜を近所の人たちが見に来て騒がしい、入るのを断りたいと言い出す。人々の願いによりしぶしぶ見物を許す。世阿弥は西行の独善性を見抜き、こんな場面を能に仕立てたのだろうか？ ちなみに西行桜は勝持寺（京都市西京区大原野春日町）に伝わっている普通の紅枝垂。

忠度 (1144~1184)

『平家物語』の中でも「忠度都落」と「忠度最期」は好きな章だ。忠度は清盛の末弟に当たり、文武両道に優れていた。源氏との戦いで都落ちする際、詠んだ和歌を俊成に託し、「前途ほど遠し・・・」と歌いながら西方に向かう。間もなく源氏の武将に見つかり、くんずほぐれつの戦いとなり、終に討たれてしまう。残された箆の中の短冊に一首の歌が書かれていた。

行き暮れて 木の下陰を 宿とせば 花や今宵の 主ならまし 忠度

小川さんは「どこまでも優しく、どこまでも風雅なさくらの歌なのではないか」と評している。同感だ、忠度は桜と一体化している。忠度の名が明記されていることにも注目したい。